



横浜ユーフォニアム合奏団 東京公演

文化庁「ARTS for the future!」補助対象事業

2021年 11月15日(月)
開演 19:00 (開場 18:30)
スペースD0 (管楽器専門店ダク地下)

【主催】
横浜ユーフォニアム合奏団





～ご挨拶～

本日はコロナ感染対策にご協力を賜り、ご来場誠に有難うございます。

100年に一度と言われる世界的大流行のコロナ感染による影響を受けた私達は、練習場所も無く、一緒に音を出す事も出来ないと言う状況下で2度の演奏会の延期と中止を経験しました。当団の存続の危機を乗り越える事が出来るのかどうか、その最も困難な時期に、皆様のサポートを頂き、文化庁の継続支援事業「ARTS for the future!」の採択を受ける事が出来まして、本日の演奏会を迎える事が出来ました。

また、本年度の当団委嘱作品としまして、2作品を本日のステージで披露させていただきます。団員一同精一杯の演奏を致します。ユーフォニアムの響きの中に会場の皆様との一体感を得ることが出来たら、こんなに嬉しいことはありません。

御支援を賜りました全ての皆様に感謝を申し上げます。

横浜ユーフォニアム合奏団 一同

～プログラム～

1. コンサートファンファーレ(E.エワイゼン)

1st.中本、Hurtado 2nd.伊藤、海野 3rd.山戸 4th.宇津木 5th.高橋 6th.深石、関口

2. 古典的協奏曲より第1楽章(J.ホロヴィッツ)

1st.伊藤 2nd.海野 Pf.岡南

3. ふるさとの四季(編曲:源田 俊一郎)

1st.高橋 2nd.関口 3rd.宇津木 Pf.岡南

4. ヘリオドール(八木澤 教司) 【令和3年度当団委嘱作品】

1st.深石 2nd.山戸 Pf.岡南

5. 3つの対話～2本のユーフォニアムのための (三澤 慶)

【令和3年度当団委嘱作品】

1st.深石 2nd.山戸

6. さくらのうた(福田 洋介)

1st.海野 2nd.山戸 3rd.Hurtado 4th.伊藤、深石

7. 小フーガト短調 BWV578(J.S.バッハ)

1st.高橋 2nd.中本 3rd.関口 4th.山戸 5th.宇津木

8. デイヴェルティメント K.136(W.A.モーツァルト、編曲:伊東 明彦)

1st.高橋 2nd.中本、海野 3rd.深石 4th.伊藤 5th.Hurtado 6th.関口 7th.山戸 8th.宇津木



委嘱作品について

ヘリオドール：八木澤 教司

横浜ユーフォニアム合奏団令和3年委嘱作品。

ヘリオドール(太陽の贈り物)は「人生を切り開く力」があると言われる石です。

私は作曲家としてデビューしたばかりの頃に、ユーフォニアム奏者の深石宗太郎先生と出会いました。

毎年のようにユーフォニアム・チューバアンサンブルの新作を初演していただくだけでなく、

演奏家としての視点で作品に対して様々なご助言をくださいました。

深石先生と共に新しいレパートリーを開発してきたことは、私が作曲家として世界に認知されるきっかけの一つとなり、まさにタイトル通り「人生を切り開く」ことになる出会いでした。

そうした感謝の意味と共に、この作品をこれから演奏するであろう奏者にとって未来が開かれるように願いを込めて作曲しました。

小品ではありますが、ユーフォニアムの魅力を存分に追求できる内容に仕上げましたので、様々な機会演奏していただけたら幸いです。

3つの対話～2本のユーフォニアムのための：三澤 慶

横浜ユーフォニアム合奏団令和3年度委嘱作品。

同団を率いる深石氏より

「アマチュアプレーヤーや中高生などが気軽に取り組めるような、ピアノ伴奏なしのデュオ」というご希望をいただいた。

なるほど氏の仰る内容やそういった作品の有用性は金管奏者でもある私としても、よく理解ができる。コンテストやコンサートを目的にせずとも、日々の練習の中で仲間と気軽にデュエットに取り組むような何気ない時間が上達を目指す金管奏者にとってはとても大きな意味を持っているのである。

そのような観点から、コンサート・コンテストピースとしてではなく、リズムや音量変化、フレーズ、サウンドのコントロール、イントネーションの統一といった要素を吹く事で学べる事を目指した作品である。

1.実務的な対話

I.Practical dialogue

行進曲風な音楽の中に、金管楽器特有のファンファーレ的な音形でのイントネーションの統一感や華やかな音色感、メロディーと伴奏の役割の変化などを感じ取りながら演奏できることを目指している。

2.穏やかな対話

II.Gentle dialogue

レガートのフレーズでの音色や音量の変化、旋律と対旋律の対比など、メロディーを「歌う」ことを意識した楽章である。

3.楽しげな対話

III.Joyful dialogue

シンプルな和声、リズム、旋律による楽章であるが、それぞれのパートの役割や声部の上下が、まるで興奮した友達同士のおしゃべりのように目まぐるしく変化する。

出演者プロフィール

伊藤 優晶 (いとう まさあき)

洗足学園音楽大学卒業。尚美ミュージックカレッジ専門学校ディプロマ科修了。
ユーフォニアムをこれまでに円能寺博行、深石宗太郎、露木薫の各氏に師事。
ユッカ・ミュリウス、外園祥一郎、鈴木浩二各氏の公開レッスン、マスタークラスを受講。
第12回大阪国際音楽コンクール金管楽器の部入選。横浜市民広間演奏会会員。

宇津木 宏光 (うつき ひろみつ)

洗足学園音楽大学及び同大学大学院音楽研究科修了。大学卒業時優秀賞を受賞し卒業演奏会に出演。
第13回日本クラシック音楽コンクール4位入賞し、前田音楽奨励賞受賞。第76回横浜市新人演奏会出演。
ユーフォニアムを深石宗太郎に師事。
演奏活動の他、吹奏楽・マーチングバンド等の指導、吹奏楽コンクール・アンサンブルコンテストの審査員を務める。

海野 百合香 (うみの ゆりか)

神奈川県横浜市出身。4歳からピアノを、12歳からユーフォニアムを始める。
国立音楽大学をユーフォニアムで卒業、同時に吹奏楽コース修了。在学中はクラシック音楽を中心に学び、
卒業後ジャズクラリネット奏者谷口英治氏のライブを聞いた事をきっかけにジャズを始める。
アイオワで開催されたITEC2019 RICH MATTESON JAZZ COMPETITIONのセミファイナリスト。
第8回ちぐさ賞ライブ選考会において審査員特別賞を受賞。
現在は横浜を中心に活動中で、ユーフォニアムの柔らかい音色でジャズでの活躍を目指し、バンドでの音作りを重ねている。

高橋 美奈子 (たかはし みなこ)

尚美ミュージックカレッジ専門学校卒業。2007、2009年同専門学校同窓会新人演奏会に出演。第3回ジュニア管打楽器コンクール1位。
第29回日本管打楽器コンクール入選。尚美ミュージックカレッジ、佐倉ウインドアンサンブルとコンチェルトを共演。
これまでにユーフォニアムを三浦徹、荒木玉緒、牛渡克之、齋藤充の各氏に師事。
現在、Brass Exceed Tokyo、東京ブラスソサエティ各メンバー。

中本 利輝 (なかもと としき)

洗足学園音楽大学卒業。在学中、平成26年度特別選抜演奏者に選ばれる。
第15回Brian L.Bowman記念コンクール、19歳以上一般の部にて第2位(1位なし)。
Asia Tuba&Euphnum Festival 2017内のコンペティションにて第2位。ユーフォニアムを露木薫氏に師事。
Dr.Demondrae Thurman、Dr.Brian Bowman、Thomas Ruedi、Mark Jenkins、Matt Tropman、Benjamin Pierce、牛渡克之、鈴木浩二、
新井秀昇、伊東明彦の各氏のレッスンを受講。横浜市民広間演奏会会員。

深石 宗太郎 (ふかいし そうたろう)

国立音楽大学を首席卒業、矢田部賞を授賞。
1986年、米国テキサス大学にて開催されたITECコンクールにおいて、日本人金管楽器奏者として国際コンクール初入賞となるユーフォニアム部門第2位。
87年、レナード・ファルコーニ国際コンクール第3位。89年、第6回日本管打楽器コンクール第2位を受賞。
シンフォニックファンファーレ東京ソロ主席ユーフォニアム奏者。シンフォニックブラス東京ユーフォニアム奏者。
海上保安庁音楽隊技術研修講師。慶應義塾大学ウインドアンサンブルOBバンド吹奏楽団指揮者。洗足学園音楽大学客員教授。
三浦徹氏に師事。

山戸 宏之 (やまと ひろゆき)

昭和音楽大学卒業。イギリス・バーミンガム音楽院に1年間留学。2007年度に1年間バンドジャーナル誌にワンポイントレッスンを執筆。
現在、ヴィヴィッド・プラス・トーキョウ、トレイルブレイザーズ・テンピース・プラスのバリトン奏者。
その他、吹奏楽、アンサンブル、ソロ等でユーフォニアム、バリトン奏者として活動している。
また、演奏活動だけではなく、吹奏楽部での指揮、指導や個人レッスンにも力をそそいでいる。
ユーフォニアムを三浦徹、大房美穂、深石宗太郎、スティーブン・ミードの各氏に師事。
昭和音楽大学非常勤講師(合奏)。東京音楽院講師。

関口 嬉架 (せきぐち きっか)※研修生

神奈川県出身。洗足学園音楽大学管楽器コース1年生在学中。
中学校の頃よりユーフォニアムを初め、これまでにユーフォニアムを海野百合香、深石宗太郎の各師に師事。
3歳の時の脳梗塞により左手足に麻痺があり、演奏時にはユーフォニアム奏者としては珍しいファゴット用のストラップを使用する。

Matthew Hurtado (マシュー ヒュタード)※研修生

テキサス州(アメリカ合衆国)出身。横浜市在住。現在インターナショナルスクールの音楽講師。
2015年にはテキサス州立大学(テキサス州)で音楽教育を学び、2017年にはレイジアナ州立大学(レイジアナ州)でユーフォニアム演奏の修士号を取得。
ユーフォニアムを演奏するほか、2018年にはプロのトロンボーン奏者として初めて日本に来て、FNS歌謡祭に出演したり、マーチングバンド(DCI)を指導したり、
多岐な活動をしている。

岡南 健 (おかなん たけし)【ピアノ・賛助出演】

洗足学園音楽大学を経て同大学院修了。大学卒業時に優秀賞を受賞し卒業演奏会に出演。
同大学アンサンブルヌーボーと眞鍋昭大のOcean's Voice、徳島県立城東高等学校オーケストラ部とラフマニノフのピアノ協奏曲第2番を協演。
第22回“長江杯”国際音楽コンクールにて優秀伴奏者賞を受賞。
これまでに室内楽を清水将仁、西脇千花の両氏に、ピアノを英美生、吉武雅子の両氏に師事。



日本のユーフォニアム発祥の地、横浜と歴史的なユーフォニアムの名称について

時は幕末、生麦事件が起きた文久2年（1862年）に、幕府により西洋式陸軍が創設されました。元治元年（1864年）に英国陸軍が横浜に駐屯し、軍楽隊の演奏が行われ、慶応元年（1866年）幕府はフランスの将校から信号ラッパの伝習を受けています。明治元年（1867年）英国第10連隊第1大隊軍楽隊長としてフェントン（John William Fenton）が横浜に着任しました。フェントンは後に初代「君が代」を作曲したことで知られています。翌明治2年（1869年）に我が国最初の吹奏楽団、薩摩藩軍楽隊が結成、横浜、本牧の妙香寺においてフェントンの指導を受けました。彼は32名編成のバンドを編成し、英国のディスティンを仲介として、ロンドンの楽器店に楽器一式を発注しました。この楽器が到着するまで、洋式に作った日本製の横笛、ラッパ、太鼓等の教育が行なわれています。この年に戊辰戦争が終結、版籍奉還が行われました。

翌1870年7月31日（旧暦明治3年7月4日）、待望の楽器を積んだ船が横浜港に到着しました。さらに日本海軍の創設者川村純義は、フェントンを通じてロンドンのベッソン社に楽器購入を依頼し、1870年12月17日に横浜港を出港する船に、吹奏楽器2組、64点の楽器購入代金の前金1500ドルを託しています。これが英国への2度目の注文で、この楽器は翌明治4年（1871年）に横浜港に到着しました。この年に廃藩置県が行われ、薩摩藩軍楽隊は鹿児島に帰りましたが、海軍に出仕した隊員も多く、翌明治5年（1871年）には陸軍と海軍が分離し、陸軍軍楽隊と海軍軍楽隊が発足しています。

話は戻りますが、薩摩藩軍楽隊の最初の伝習生に森山孫十郎という鼓手がいました。残念な事に明治3年1月12日に横浜において病没しました。英国から最初の楽器が到着する前の話です。その墓前に当時の隊員の名前と献辞が彫られた献灯が建てられました。この献灯には30名の名前が認められますが、この最初の伝習生達の担当楽器について後年研究が行われ、明治4年に海軍楽手として入団した折田徳道に依頼し、当時の記憶から隊員名簿が作成されました。この隊員名簿の一覧によると、「尾崎惟徳 中位大ナル楽器ニシテ（ユーホネン）ト稱セシナラン」と読む事が出来る人物がいます。また、海軍軍楽隊初代軍楽長の中村祐庸の遺録によりますと、「伝習生人名 ユーホーニオン 尾崎平次郎」との記載があります。これらの資料から、英国より日本に初めてやってきた吹奏楽の楽器一式の中に、「ユーホネン」「ユーホーニオン」と呼ばれた楽器が含まれていたことが明らかになっています。

さて、この「ユーホネン」「ユーホーニオン」などと呼ばれた最初の英国製の楽器購入の話になりますが、この取引を仲介したとされる英国のディスティン社は、1845年にロンドンで店を構え、翌年より英国内におけるサクソルン（Saxhorn ベルギーのアドルフ・サククスが考案した一連の金管楽器）の代理店になっています。

1850年よりディスティン社はサクソルンの委託生産をしていたのですが、アドルフ・サククスと経営方針が合わず、1857年頃にこの契約を解消し、以来ディスティン社のカタログからサクソルンの名前が消えて、上向きベルの金管楽器（おそらく現在フランスでサクソルンバスと呼ばれている楽器、小バス）に「Euphonion」という名称を対応させています。これに対抗するために、アドルフ・サククスは自身が制作し

たサクソルンを英国に持ち込み、サクソルンで統一された金管の楽団を結成、これが今日の英国の金管バンド（ブラスバンド）として発展しています。

1868年にディスティン社は英国のブージーに買収されて、ブージー社(boosey & co.)が金管楽器の生産を引き継ぐ事になりました。薩摩藩軍楽隊の使用する楽器の注文をディスティンに出したのがこの翌年の1869年ですから、楽器の生産はブージー社に引き継がれています。その後、1874年にブージー社の楽器開発者によって、現在の私達の使用するユーフォニウムに装備されているコンペンセイティングバルブシステム（セミダブル方式）が発明されました。1940年にブージー社はベッソン社と合併し、現在はベッソンブランドとして足跡を残しています。1984年には我が国初のセミダブル方式の国産のユーフォニウムがヤマハから発売されました。

話が進みすぎました。フェントンに話を戻しますと、この後フェントンは明治5年に海軍軍楽隊、明治7年に宮内庁楽部のお雇い外国人となり、軍楽隊の隊員、雅楽を演奏する伶人に欧州楽（吹奏楽編成）を伝えています。当時の宮中の記録から、「ユーホー子ン（子は子年、ねずみ年の子です。ユーホーネン）」「ヒー、フラット、イウフヲニアン（フは小文字の表記）」などの楽器名の記載を読み取ることができます。

翌明治8年に西南戦争が起こり、海軍軍楽隊は鹿児島に派遣され、城山の西郷軍に惜別の演奏を送っています。この後、海軍軍楽隊は明治12年にお雇い外国人としてドイツ人のエッケルトを雇い、エッケルトは明治20年に宮内庁楽部に雇われています。この年に東京音楽学校が創設されました。海軍や宮中で使用する楽器は英国製のまま、楽器の呼び方はドイツ式となり、「ユーホニオン」などの英国式の名称とドイツ式の「バリトン」の名称が混在し、また、フランス式を採用した陸軍軍楽隊の「小バス」などの名称の使用も相まって、様々な名称が国内に共存することになりましたが、異なる国のシステムを導入したために、楽器の名称だけでなく、演奏する楽曲やパート譜の記譜法も異なり、奏者間の交流も容易にはできないという事態が起こりました。このような状況ではありましたが、日清日露戦争を背景に国内の業者が金管楽器の製造を初め、明治42年（1909年）三越少年音楽隊が民間の吹奏楽団として発足し、国内各地でこのような百貨店がスポンサーとなる民間の団体が相次いで発足しました。三越音楽隊は第1次世界大戦中の大正4年（1915年）に、日比谷公園音楽堂で「ユーホニオン・ソロー・セリア」を演奏しています。このあと大戦景気に沸いた日本でしたが、大正10年（1921年）原敬首相が東京駅頭で暗殺され、時代は軍国主義へと向かいました。同年、日比谷公園音楽堂で東京派遣海軍軍楽隊が「セリア」（バリトン獨奏曲）を演奏しています。時代は昭和に入り、民間の吹奏楽団が設立され、各地で吹奏楽連盟が発足し、コンクールが開催されるなど、日本国内の吹奏楽の活動が徐々に盛んになりつつありましたが、満州事変や2・26事件が起こり、戦時色が強くなると、次第に演奏活動は制限され、ついに第二次世界大戦の開戦と戦況の悪化で国内での吹奏楽の活動は停止を余儀なくされてしまいました。

昭和20年（1945年）の敗戦により陸海軍の軍楽隊は消滅しました。昭和26年（1951年）警察予備隊音楽隊が発足、翌年には海上保安庁音楽隊が発足しています。憲法9条と日米安全保障条約の締結を背景とし、自衛隊が創設され、昭和29年（1954年）までに陸海空すべての自衛隊音楽隊が設立しています。各音楽隊は米国式の吹奏楽を導入し、戦前の英独仏の異なるシステムの併存という問題はここによりやく解決をしました。戦前の教育を受けた優秀な音楽隊員が復員し、様々な音楽活動を行う事で民間の洋

楽、スクールバンド（吹奏楽）が発展しました。1960年に安保闘争、所得倍増計画が発表され、昭和37年（1962年）に東京藝術大学で初めてのユーフォニアムの卒業生（当時はバリトン科）として石崎一夫氏が同大を卒業しました。昭和48年（1973年）に三浦徹氏が米国留学より帰国。プロの吹奏楽団の活動や音楽大学において吹奏楽の教育が盛んになり、「ユーホニウム」「ユーフォニウム」などの名称が共存する中、「小バス」「バリトン」の名称は次第に使われなくなりました。昭和58年（1983年）に「音大卒業生によるユーフォニアム デビューコンサート」の初開催、昭和61年（1986年）の日本管打楽器コンクール「ユーフォニアム部門」の初開催など、民間の研究機関やプロの奏者たちなどが「ユーフォニアム」の名称を使用することが一般的になりました。そして近年はさまざまなメディアで「ユーフォニアム」の楽器名が広く一般国民に紹介され、ようやく私達は「ユーフォニアム」の楽器名を国内で統一された名称として使用する事ができる世の中になりました。

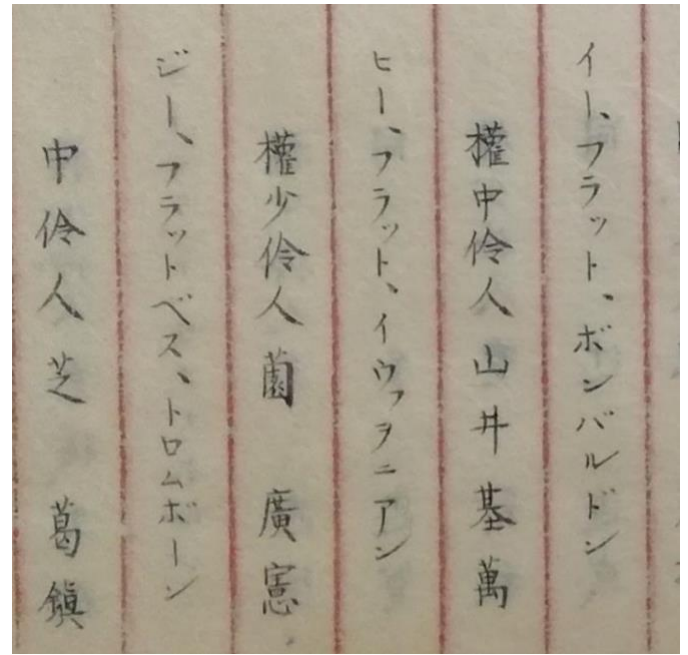
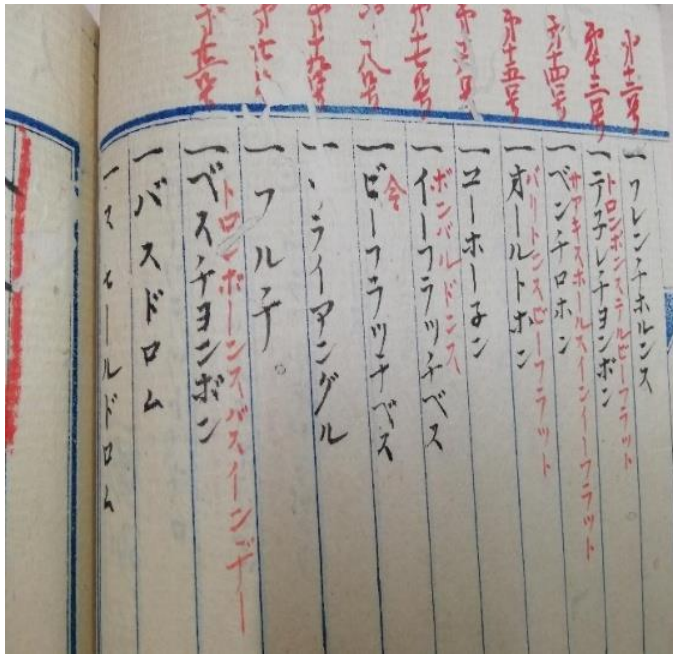
さいごに

横浜ユーフォニアム合奏団の主催事業として、筆者と清水唯一朗（政治史学者、慶応義塾大学総合政策学部教授）、戸ノ下達也（洋楽文化史研究会会長、都留文科大学非常勤講師）両氏による鼎談「日本のユーフォニアム150年の歴史を考える」が2021年11月5日に横浜山手・イギリス館において開催されました。穏やかな木漏れ日が差し込む洋館の一室で、筆者は両先生の物事の根源を見極める姿勢に心を打たれ、貴重な知見を得ることができました。幸せな時間が流れました。

明治維新に際し、フランスの後ろ盾を得た幕府と、英国の後ろ盾を得た薩摩の関係が、そのまま陸軍と海軍に引き継がれましたが、第二次大戦の敗戦による両軍の消滅と、その後の憲法9条と日米安保による自衛隊の発足により、ユーフォニアムという楽器の名称の統一とともに、この問題はようやく終焉を迎えることになったと筆者は考えます。幕末から第二次世界大戦の敗戦までの70数年間と、戦後が始まってから現在までの70数年間と、ほぼ同じ時間が経ちますが、日本が国策として行った西洋音楽、吹奏楽の受容の歴史は、どちらも激動の時代と共にあり、ユーフォニアムの名称の変遷は、この歴史の事柄を映し出す鏡、そのものであると思います。70数年間をかけて発展したものを、また一から始めるのではなく、さらに変化させながら一つのものに収束させるのも同じく70数年間の日時が必要であった、と考えることも出来るのではないのでしょうか。

清水唯一朗、戸ノ下達也、両先生に深く感謝を申し上げますとともに、このような貴重な発表の機会を与えていただきました横浜ユーフォニアム合奏団の皆様、演奏会にお越しいただきまして、このような拙い文章を最後まで我慢強くお付き合いをして頂きました皆様方に心より御礼を申し上げます。

横浜ユーフォニアム合奏団 代表 深石宗太郎



「欧州楽録」 欧州楽器名称
ユーホー子ン (ユーホーネン)

「明治九年天長節書類」 欧州楽役割
ヒー、フラット、イウフラニアン (フは小文字)

参考文献

「海軍軍楽隊」 楽水会編 国書刊行会 1984年
「陸軍軍楽隊史」 山口常光 三青社 昭和43年
「洋楽導入者の軌跡」 中村理平 刀水書房 1993年
「御沙汰留」 雅楽局 宮内公文書館蔵 自明治3年 至明治12年
「欧州楽録」 式部職 宮内公文書館蔵 自明治7年 至明治8年
「天長節書類」 式部職 宮内公文書館蔵 明治9年
「西郷隆盛惜別譜」 横田庄一郎 朔北社 2004年
「日比谷公園音楽会のプログラム」 谷村政次郎 つくばね舎 2010年
「概説・日本の近現代史に息づく吹奏楽」 戸ノ下達也 横浜ユーフォニウム合奏団蔵 2021年
「日本におけるユーフォニアムの歴史」 深石宗太郎 洗足論叢 2007年
「明治～昭和初期における国産金管楽器についての考察」 深石宗太郎 洗足論叢 2008年
「第二次世界大戦と戦後復興期における日本のユーフォニアムについての考察」 深石宗太郎 洗足論叢 2009年
「音大卒業生によるユーフォニウム デビューコンサート1」 プログラム 1983年3月10日 石橋メモリアルホール
「ニューグローブ音楽辞典 (英語)」